

佳作

チーム医療としての緩和ケア『せめて正月くらいは』

萬木義範（塩野義製薬株式会社 第四学術部）

がんの痛み、それは我々の経験と想像をはるかに超えるとてつもない苦痛。鎮痛薬でコントロールできる痛みであるにも関わらず、十分な薬剤を十分な量を処方されていないため完全除痛に至ることなく、痛みを我慢することを余儀なくされている患者はまだ多い。

今日も鎮痛薬を増量もせず「様子を見ましょう」と言った医師の発言が緩和ケアチーム内で取り上げられ、その話を聞いた私も憤りを感じる。自分の親にも同じことを言うのか、どうして患者の痛みにもっと関心を持ってないのか。そんなやる方ない怒りが私を病棟に向かわせる。若い先生方を対象とした医局での鎮痛薬の説明会。「患者さんの痛みに関心を持ってください。患者さんの声に耳を傾けてください。看護師さんのモニター結果に耳を傾けてください。」鎮痛薬の説明以上に力が入る。私がここまでやるのには理由がある。

阪神大震災が起きた年の夏、突然の尿閉に泌尿器科を受診した父につけられた診断は末期の前立腺がんだった。「余命半年」。アタマが真っ白になった。主治医の先生の厳しいムンテラをそのまま母や妹に告げるわけにはいかない。つらくて涙が止まらなかった。幸い前立腺がんは予後が良い疾患で、入退院を繰り返しながらも薬石効あり、今日まで低空飛行ながらも生き永らえている。去年は膀胱からの出血が止まらず尿路で固まった血塊が排尿を妨げ、2回救急車に乗った。腎臓から膀胱を経由せず排尿できるように尿路変更術を受け、ポータブルの尿バッグをつけて日常生活が送れる様になった。まったく医学の進歩には頭が下がる。色々な苦難はあったが、おかげさまで心配していた年末の家族旅行にも去年も行くことができた。孫たちに囲まれて写真に収まる父はどことなく涙目になっている。幸い痛みは「A」でコントロール出来ており、オピオイド（注1）のお世話にはまだなっていないものの、将来に対する不安、来年も旅行に来れるだろうかという想いが頭の中で渦を巻いているに違いない。ファインダーを通してその気持ちが痛いほどよく解る。

がんを患った患者さんは確かにつらい。でも患者を支える家族もまたつらい。その視点で見たモノを医療者に伝えたい。父の闘病を見て、母の懸命の看病を見て私の行動は変わった。患者の後ろにいる家族も救いたい。痛みで顔をゆがめる肉親の姿を見せたくない。処方していただいた鎮痛薬の効き目をフォローする時、遠く離れた京都で戦っている両親の姿が目につく。勤務が静岡であるために大したことはしてやれないが、痛みが出てきた

ときに「様子を見ましょう」という医師には診せたくない。完全除痛が可能なのに痛みを我慢させたくない。そんな思いから私は担当病院の説明会では声を大にして訴える。「患者の声に耳を傾けてくれ」と。

そんな姿に共感してくださる緩和ケアチームのメンバーでもある認定薬剤師の先生や看護副部長が私の大きな味方である。昨年12月、「耳鼻科に入院中の患者さんで、鎮痛薬を増やしてもまだ痛がる人がいる。鎮痛薬の効き目をもっと大きくするにはどうしたらよいか」と相談を受けた。彼らは私を、痛みを取るために立ち上がった同志として扱ってくださる。私もその気持ちに何としても応えたい。ディスカッションは薬剤部の通路であったり、看護部であったり場所を問わず繰り広げられる。私が提案した鎮痛薬の増量が受け入れられ、翌朝「良いみたい!」との患者さんの反応を聞いて思わず涙がこぼれる。よかった。本当によかった。この仕事をしていて良かったと実感できる瞬間である。結局痛みのコントロールができた、その患者さんは外泊まですることが出来た。不幸にして外泊中に頸部の腫瘍が破裂して救急車で戻っては来られたが、家に少しでも帰してあげることができた。もっと早くにコントロールがついていれば、あと数日長く家にいたかも知れないという思いはあるものの家族のいる家で普通に近い生活ができた。入院中のすべてのがん患者さんに、「せめて正月くらいは痛みを忘れさせてあげたい。」そんな合言葉を掛け合いながら私たちの戦いは続く。「この病院に入院して良かった。先生ありがとう、楽になりました。」と患者が微笑みかける日まで。

(注1) オピオイド：モルヒネ、コデインなどのアヘン類縁物質のこと